Weblog 利用による科目間協同学習の取組
－情報教育と英語教育の融合－

小松　泰信・中井　弘一・長井　茂・加藤　映子

Using a Weblog to Develop an Interdisciplinary Learning Environment:
Integration of ICT Education and English Education

Yasunobu Komatsu, Hirokazu Nakai, Shigeru Nagai, Eiko Kato-Otani

抄　　録

教育現場での情報通信技術（ICT）の利用は、様々な分野にその応用が進んでいる。各分野での応用は、学問分野の特性に合わせそれぞれの分野の学習コンテクストの範囲内に閉じられた利用となっている。本稿は、英語教育の授業外教材として企画された English Newsletter（ENL）のコンテンツ分析と、この学習オブジェクトを情報導入教育の学習項目にしてアプローチした科目間協同学習の方法と成果の分析である。非同期学習が可能な学習オブジェクトをネットワーク上に共有することで、科目の壁を超えた異なる学習過程の共存と融合が成立する。

キーワード：英語教育、情報教育、Weblog、学習オブジェクト、English Newsletter

（2007 年 9 月 28 日受理）

Abstract

Thanks to the development of Information and Communication Technology (ICT), the use of ICT has been applied to various fields in education. However, its application has been limited in each subject. This study examines the integration of English Newsletters developed as extra-curricular reading material and ICT education at Osaka Jogakuin College. This integration provided students with a new learning environment which combines two areas that up to now have been unconnected: English education and ICT education.

Key words : English education, ICT education, Weblog, learning object, English newsletter

(Received September 28, 2007)

1. はじめに

文部科学省の平成 19 年学校基本調査（文部科学省 , 2007）によると、高校卒業者の大学等進学率は 51.2％と前年度より 1.9 ポイント上昇している。こうした高い進学率は、日本の教育水準を高めるために歓迎すべきことであるが、一方、高等教育学習レベルに到達していない学生を大学が迎える状況を生み出している。また、情報化の急速な進展にともない、地球がグローバル・ボーダレス社会となっている今、世界や情報化社会に通用する人材の育成が大学に求められている。そのため、大学は、最高学府の研究機関としてだけでなく、教育機関としての人材育成の役割が期待され、大学教育の有効性や成果が大学の第三者評価の評価対象となっている。

本学の教育カリキュラムは、各教科の専門担当者による機能的分業による教育を実施すると共に、担当者一人の工夫や責任のみに依存せず、相互に共有し強化し合う指導体制を特色にしてきた。そのひとつとして英語教育においても課外の英語教育活動を共通化されたプログラムで実施していくことがカリキュラムの実質化につながるという観点から、授業外で全学生に English Newsletter（以下 ENL とする）が企画・提供された。

情報通信技術の進展にともない教育現場での情報通信技術の利用は、様々な分野で応用が進んでいる。英語教育において課外教育活動のプログラムとして企画された ENL は、双方向通信が常時可能な Weblog コンテンツにして提供されている。本稿では、このコンテンツに異なる学習コンテクストである導入時教育に位置づけられる情報教育からアプローチを行った。それぞれの教育分野の学習コンテクストに沿った利用がなされる学習教材は、双方向通信が可能なコンテンツに位置づけることによって、多様な文脈からのアプローチが実現し分野を超えた協調学習の可能性が生じた。その具体的方法と成果を分析し、導入教育の途上にある 1 年生の学生が残した多様なコンテクストから協同学習環境を分析する。

2. 情報通信技術の教育利用

2. 1 大阪女学院の情報通信基盤

大阪女学院大学・短期大学における情報通信基盤整備は、2004 年度の大学開学を機に教育情報化を推進すべく段階的に実施されてきた。目標としてきたところは、国際的教育環境に参画するための基盤整備にあり、そのために次の点で整備を行った。

1）学内に散在している情報システムの統合とユーザ認証の一元化
2）映像配信等のマルチメディア化を視野に入れた配信環境の充実
3）教育情報の高度化をめざす学習管理システムの整備
4）全構成員による国際的情報発信基盤の強化

このための段階的インフラ整備として、2004 年度には、Learning Management System[1]（以下 LMS とする）とビデオ配信用サーバが構築された。2005 年度からは、Campus Portal に

よるユーザ認証の一元化と SSO（Single Sign-On）によって学内の様々なシステムを、一度の Portal Login で利用できる環境の整備が確立された。2005 ～ 2006 年度には、Contents Management System[2]（以下 CMS とする）による情報発信型 Web サービスをめざして、Weblog として Movable Type[3] を採用し、Web サイトのトータル管理のために Plone[4] を採用した。こうしたインフラ整備と平行して、2004 年度の開学時には、全学生に iPod を配布し音声教材の利用とストレージとして大容量データの携帯を可能にする学習環境が用意された。2005 年度からは、英作文評価システムである Criterion を採用し、ライティングの指導強化を行うなど周辺環境の充実も図られている。

2. 2　情報発信とコミュニケーション

こうした取り組みのひとつに、国際的情報発信基盤の強化が上げられる。すなわち従来の email や Web 閲覧等を通じて国際的情報を利用するに止まっていた情報インフラを、Web ベースのコミュニケーション・システム及びメタデータを活用した情報発信基盤を強化することである。これには Weblog をはじめとした CMS を用いて、全構成員一人一人が世界的情報発信可能な基盤を確立することが前提となる。したがって、システムの整備もさることながら、学生・教職員一人ひとりが、操作技術的な理解はもちろんのことグローバル環境に向き合えるだけの情報セキュリティを含めたリテラシーの確立が条件となった。そのために 2005 年度より必修科目として設定された「デジタルネットワーク基礎」に Weblog の運用及び情報セキュリティに関する学習項目を設け、全学生のリテラシー確立をめざした。教職員には 2006 年度の FD において同様の学習内容を重点的に取り上げた。

対外的な取り組みに平行して、まず学内での情報流通をこうしたプラットフォームの上に乗せようとする取り組みも始まった。その取り組みのひとつとして、英語教育における授業外教材を全学生に配信する取り組みが、サイト ENL である。

2. 3　導入科目と各分野での ICT 利用の現状

次に 2007 年度の時点で本学の情報通信基盤上に活動している内容を概観しておく。学生・教職員全員が Campus ID を持ち、自分の利用できる情報システムを Campus Portal を通じて一元的に使うことができる。また、従来音声教材や映像教材としてアナログ媒体で保存・利用されてきたコンテンツも、映像配信やポッドキャスティングによりデジタル化で活用が図られてきた。

2. 3. 1　情報教育利用

LMS を利用した教育情報化の全学的な取り組みとしては、情報系の必修科目が授業として挙げられる。情報関連科目は、導入科目として学習の前提条件を一定に整える役割も有しているために、情報化によるクラス間の標準化や成果の測定が必須条件である。また、情報関連科目がすべて LMS 上で運営しているために、教科間の学習項目の連携や、リアルタイムに各学習者の学習成果を共有フィードバックしうる体制が確立されている。

2. 3. 2　英語教育利用

英語教育での代表的な取り組みとしては、1年次の英語診断テストが全学生に実施されている。これは Reading, Grammar の診断テストをオンライン上で受けることで、本学独自の評価データを収集すると共に学生にはリアルタイムで診断結果を示すことができる。また必修科目のさまざまな視聴教材がデジタル化されて配信されている。そのほか授業外支援の一環として開設されている Self Access Study Support Center では、LMS による学生支援情報の共有化が計られ、セメスター留学の学生については留学申請から留学中のサポートについてもシステムの活用が計られている。

2. 3. 3　その他の利用

キャリア支援に関しても LMS による全学的な取り組みが計られている。Career Support Center では、大学に寄せられた就職情報を一元管理し LMS 上にデジタル化し学生が利用できるようにしている。これにより、センター内に求人票等の掲示物やファイルの必要が無くなったにとどまらず、学生は、自宅からでも 24 時間必要な情報にアクセスできる環境が確立されている。

このほかに、CMS の一種である Weblog は、学内全構成員が Campus ID により立ち上げることが申請を行うことなく可能であり、CMS を利用した様々な部門のサイトが立ち上がっている。これらのサイトは、2008 年度に統合される予定である。

3.　英語教育の展開

3. 1　英語教育の学習環境

大阪女学院大学・短期大学における1, 2年次の英語教育の特色は、21 世紀の様々な課題を採り入れながら、「読む」「書く」「聞く」「話す」という言語 4 技能をバランスよく育成する授業展開にある。現代社会の問題として「平和の追求」「科学と宗教」「現代と人権」「生命の危機」という4つのトピックを英語教育課程に設定し、英語で意味のある内容を学ぶ content-based approach という指導法を用いている。具体的には1年次に Integrated Units と呼ばれる統合課程（図1参照）で、各トピックを 5 ～ 6.5 週で学習し、リーディング、ディスカッション、ライティングという一連の流れの中で、ユニットトピックの内容を理解しながら英語のスキルの向上をめざすカリキュラムを構築している。また、各ユニットには、「例証」「過程」「比較・対照」「原因・結果」「説得」という論理展開法を指導している。

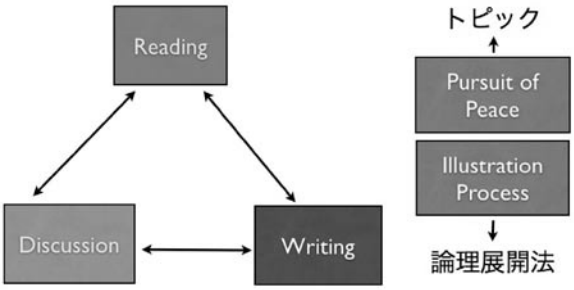

図1　1年次 Integrated Units [統合過程]

2年次では、「平和の追求」「科学と宗教」「現代と人権」「生命の危機」という4つのトピックをさらに深く学習する構造となっている。学生が選択したトピックについて、言語の4技能の伸長を促す授業展開を行っている（図2参照）。

図２　２年次英語の4技能の伸長を促す授業展開

このように、高等教育機関の教育の根源をなす「教養」をベースにした「中身を伴った英語」を身につけることを重視し、その成果は2年間の英語学習で全国の大学2年生、大学院生の TOEIC-IP のスコア平均を大きく上回る結果を出している。

3. 2　ENL の内容

本学は、充実した英語教育実践の伝統のもと、英語が使える人材の育成においてその教育の有効性を示してきた。大学の講義・演習は、原則的には個々の教員の識見や経験を基に行われている部分もあるが、本学では英語教科指導を連携し、総員の力を結集する

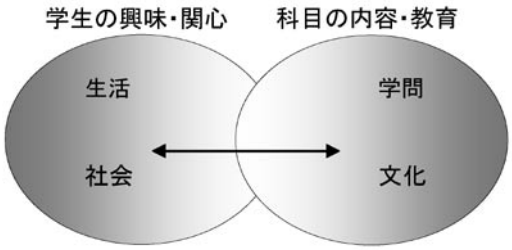

図３　関わりのある領域、関心のある領域

態勢をとっている。その上で、課外の英語教育活動を共通化されたプログラムとして実行していくことが、カリキュラムの実質化につながると考えている。

図３が示すように、学生の興味・関心を大学での学びの関わりのある領域、関心のある領域に惹き込むことが、自律的な学習につながると考え、課外英語教育活動の充実を目的に英語による Newsletter を学生向けに発行することを企画した。試験 ENL の発行結果、メールによる情報発信形態は大学から学生個人への一方通行のコミュニケーションにすぎないことを認識した。そのため、第３号よりブログ形式での発行とすることにより、コメントなどの共有を可能にすることで双方向性のコミュニケーションを確立し改善を図ることにした。なお、ブログへのアクセスがなければ効果がないので、ENL の発行通知をメールで送ることした。また、記事編集の一部はアルファベット順に本学英語教育担当教員に依頼することにした。

3. 2. 2　発行の編集方針

本学の英語教育の特色は、コンテンツベースで英語学習を進めるところにある。編集方針を考えるに当たっては、information age から conceptual age に世界が動いている現代社会に見合う ENL の発行を意識し、Pink, D. のビジネスモデルの”The six senses”を編集の基本概念とした。“The six senses”とは、1. Not just function but also DESIGN、2. Not just argument but also STORY、3. Not just focus but also SYMPHONY、4. Not just logic but also EMPATHY、5. Not just seriousness but also PLAY、6. Not just accumulation but also MEANING である（Pink, 2005, pp.65-67）。

この6項目を踏まえ、①ニュースとして情報を伝える機能を果たすことに終始するのでなく、創造的であったり、写真掲載など感情に訴えたりするなど、読みやすいデザインを考える。②課題を提示するだけでなく、読後感があり、ストーリー展開のあるものを記事内容とする。③「木を見て森を見ず」ということがないよう、教育情報に偏った内容でなく、大きな観点から統合的な視点を持って幅広く話題を掲載する。④記事内容は論理的であるべきだが、共感を与える内容とする。⑤伝達式の硬い記事内容でなく、図３で示したように学生の関心を引き寄せるため「遊び」の要素を加える。⑥日々の学習の大切さや難しさを伝える記事を集めるのでなく、目標や方向性があり精神的達成感をもたらす内容を構成する、を編集の基本方針とした。

また、ENL の発行に当たって、記事内容や項目立てを検討するため、読者となる学生に事前に希望記事内容の聞き取り調査を行ったところ、編集委員グループで設定した編集基本方針に通じる調査結果を得た。

表１　E-NEWS Letter に学生が望む話題の主な例（学生からの聞き取りによる、N＝30）

・ハリウッドスター、アーティストの日常生活やスキャンダルといった裏話。
・海外の同世代の女性のファッション事情（LA,London など）
・日本の流行語を英語で表すとどんな表現になるか？または海外諸国の流行語。
・世界的なニュース、事件
・国際的に活躍していた、している人の話
・新作映画の紹介
・海外で頑張っている日本人の話
・先生が海外で体験した面白裏話

要望

普段、内容の難しい授業を受けている分、ラフな内容で英語に触れたい

これらのことをＥＮＬ編集ワーキング・グループで検討し、以下のようにＥＮＬの項目立てを行った。

【0】INDEX ヘッドライン

各号のＥＮＬの紹介をするとともに、時機に見合ったあいさつ文を掲載する。英文記事を読むための Warm-up として、タイムリーな内容の英文空所問題を２題掲載する。

【1】What's New?（最新情報）

当面（2ヶ月先を含め）の行事日程や企画を伝える。英語教育活動の報告なども本項目上に掲載する。

【2】Hot English（英語・インターネット便利サイト情報）

英語そのものや、英語学習のための情報を提供する内容を掲載する。

【3】Feature（特集）

時機に応じて､コンテンツのある内容を掲載する。各号のメイン記事となるようにする。

【4】Popular Topic among OJC Students　（学生間で話題になっているもの）

学生の関心があると思われる話題や関心をえる話題を拾い上げ掲載する。

【5】One Point Advice from the Teachers　（ワンポイント・アドバイス）

英語教育担当教員に学生の英語学習上のアドバイスを一つ記事内容として原稿を依頼する。

3. 2. 3　発行内容

ＥＮＬ創刊号を 2006 年 6 月 21 日に発行して以来、2007 年 7 月 31 日の 7 号まで発行してきた。各号の記事内容の概略は、Appendix 1のとおりである。第 4 号より Feature 記事は English Native が担当している。

3. 2. 4　編集記事内容のデータ分析と考察

発行した記事原稿を、文法解析ソフト GRAMMARIAN PRO X for Macintosh を使って、各項目記事の「語数｣、「リーダビリティ｣、「おもしろさ」などをチェックした。

【単語数】

表 2 は目次項目別記事の使用単語数である。総語数においては、第 4 号から 2000 語前後となった。これは特集記事編集を English Native に任せ、記事内容を読み物として充実

させたことによる。One point advice は７号掲載分がやや長いが、平均して 100 語少しの内容で、Newsletter として一読できる量を標準とした。

最大の語数の記事は、第５号の特集記事（Graduation: A Time of Endings and Beginnings）で、複数の教員の原稿を編集したものである。やはり、1000 語を超えるとブログ通信による記事としては長いと言える。

表２　１～７号における記事項目別単語数の比較　　**単位：語**

号	1st	2nd	3rd	4th	5th	6th	7th	平均
Index	45	31	18	22	54	96	113	54
Hot English	126	133	189	679	287	263	285	280
Feature	187	259	516	988	1107	958	497	645
PopularTopics	217	399	192	256	614	521	890	441
One point ad	79	109	138	121	101	156	312	145
総語数	654	931	1053	2066	2163	1994	2097	1565

【リーダビリティ】

Newsletter のテキストは、「リーダビリティが高い」、「読みやすい」ことが求められる。それには、(1) 語彙が単純である。(2) 文章と段落の構成として、文章が単純で短い。(3) 簡潔な表現などがその要因になる。各号の目次項目別のリーダビリティを Flesch-Kincaid 式で求めた結果が表3である。Feature（特集）記事と Popular Topics が、相対的にリーダビリティが低い。コンテンツ重視の記事であり、単語数も比較的に多いことがその要因であるが、英語教育の観点から、Krashen（1988）のインプット理論のｉ＋1的にチャレンジする内容が必要である。全体の平均としては、60％以上の成人が理解できるという結果であり、ＥＮＬの記事の英語レベルとしては妥当と考えられる。

表３　読みやすさ（上段：～%の成人が理解できる、下段：米国における学年レベル）　　**単位：％**

	1st	2nd	3rd	4th	5th	6th	7th	平均
Index	58	80	75	57	75	68	81	70.6
	7th	3rd	6th	10th	4th	7th	4th	5.9th
Hot English	76	64	86	65	73	74	68	72.3
	4th	6th	5th	8th	8th	5th	7th	6.1th
Feature	81	64	75	51	55	68	58	64.6
	5th	8th	5th	12th	11th	7th	10th	8.3th
PopularTopics	47	59	90	68	31	77	55	61.0
	11th	9th	3rd	8th	12th	6th	10th	8.4th
One point ad.	62	81	73	62	78	75	74	72.1
	8th	5th	5th	9th	5th	5th	7th	6.3th
平均	64.8	69.6	79.8	60.6	62.4	72.4	67.2	68.1

【おもしろさ】

Grammarian の統計処理に「おもしろさ」があり、率によって評価コメントが変わる。

～ 39: おもしろい　40 ～ 59：非常におもしろい　60 ～ 74：劇的　75 ～：非常に劇的との規準でコメントされている。

表4　おもしろさ　　**単位：%**

	1st	2nd	3rd	4th	5th	6th	7th	平均
Index	51	65	56	64	35	16	61	49.7
	非常におもしろい	劇的	非常におもしろい	劇的	おもしろい	ややおもしろい	劇的	
Hot English	33	30	51	74	100	44	11	49.0
	おもしろい	おもしろい	非常におもしろい	劇的	非常に劇的	非常におもしろい	ややおもしろい	
Feature	63	62	44	49	70	61	60	58.4
	劇的	劇的	非常におもしろい	非常におもしろい	劇的	劇的	劇的	
Popular Topics	34	57	61	54	49	58	77	54.4
	おもしろい	非常におもしろい	劇的	非常におもしろい	非常におもしろい	非常におもしろい	非常に劇的	
One point ad.	72	49	57	30	85	79	41	59.0
	劇的	非常におもしろい	非常におもしろい	おもしろい	非常に劇的	非常に劇的	非常におもしろい	
平均	50.6	52.6	52	54.2	67.8	51.6	50	54.1

表 4 はその「おもしろさ」の評価の集計結果である。One point advice と Feature（特集）記事が、「おもしろさ」が高い評価結果となっている。メッセージ性のあることがその要因と考えられる。全体的に見て記事は「おもしろさ」の評価は十分との結果を得た。編集方針の、1. DESIGN、2. STORY、3. SYMPHONY、4. EMPATHY、5. PLAY、6. MEANING の要素を意識した記事編集の大切さがうかがえる。学生とのコンピュータベースの通信では、記事内容のおもしろさが双方向のコミュニケーションを繋ぐ生命線である。読みにくい記事、おもしろくない記事は、読まれることはない。課外英語学習の要素を含む ENL として、常にニュース記事の読みやすさやおもしろさを追求することが、編集の責務であることに異論はない。

4. 情報教育と英語教育の協同学習

4. 1 導入教育としての情報教育

大阪女学院大学・短期大学における情報教育の主な役割は、大学での学習に備える導入教育としての側面がある。大学の教育課程では調査研究群に属し、大学における学びの基礎となる調査研究法や学術的コミュニケーション技術を習得することにある。一年生の必修科目群として履修を求められる科目としては、情報検索および図書館利用を学び小論文を完成させる内容である「情報の理解と活用」（四大）および「研究調査法」（短大）がある。他方で最低限の ICT スキル習得のための「デジタルネットワーク基礎」（以下 DNF とする）が開講されている。これらの教科は、すべて LMS を介した授業内容になっているため、それぞれクラス内での学習状況は、教科を超えて共有されているため相互依存的学習制御が可能になっている。また、これら科目群受講後に予定される様々な教科での学習の前提条件を提供している。ここでは ENL を、DNF の課題として Weblog 利用の学習課題とした。

4. 2 ENL サイトと情報教育の課題

情報関連科目の内、半期で全学生が履修する DNF は、導入教育的要素が最も高い教科になっている。半期をさらに2グループに分け全学生が夏期までに習得を終える教科であり、目標とするところは、コンピュータの基礎的操作とネットワーク資源の利用技術を身につける事にある。日進月歩の情報通信技術にあって、高等学校における教科「情報」で取りこぼされた学習課題を補うことで、入学生に存在する格差を是正すると共に、大学独自に構成された今日的技術課題に取り組む内容が盛り込まれている。2007 年度の学習内容は、1）ネットワーク基礎として Mail・Campus Portal・LMS 等の利用技術、2）ネットワーク応用として Weblog による情報発信の技法、3）アプリケーション基礎として MS-Word・MS-Excel の操作、さらにそれらの基礎となる、4）情報の扱い方やセキュリティを取り上げている。これらの学習内容は、年度ごとに見直され時代に即応した課題を盛り込むことができる。

この中で、2）Weblog による情報発信は、全学内構成員が Web による情報発信の技法を習得することで､英語運用能力を活用した国際的情報発信基盤を得るためのものである。具体的学習内容は、Weblog の概要説明と作成および情報の取り扱い方についてであり、スケジュールの中では第4週に位置している。作成では、自分のサイトを用いて、記事の投稿や他者の記事に対するコメント・トラックバックなどのコミュニケーションプロセスの実際を実習する。その際、コミュニケーションを体験する上で、近接する他者である新入生同士のサイトにアクセスしコミュニケーションを行う方法がとられる。しかし新入生の新しいサイトには、過去の投稿が存在しないことから概要を説明する上での Weblog の効能を実感する事例とはならなかった。

ENL は、学生の興味・関心を視野に入れた課外英語教育活動であることから、大学にお

ける学習過程に導く上でも格好のコンテンツであり、それを使った実習では以下の点を意図し実施した。

1) 課外英語教育活動とは異なる情報スキル習得の文脈で、コンテンツを活用できる。
2) 導入教育として情報技術スキルの獲得にとどまらず、本学の教育分野に即したコンテンツレベルでの導入ができる。
3) 英語・情報等のそれぞれのスキルが各学習者の中で統合される機会を提供し、より高次の総合的運用能力が醸成できる。

各クールの第4週にそれぞれ154名の受講者に対してENLをURLと共に紹介し、気になった記事に英語あるいは日本語でコメントを残すよう課題を出した。紹介に際して、英語などの分野や教育的意図については触れず、ブログの機能やおもしろさを説明する例として提示した。従って受講者は、ENLサイトにある各英文記事を読み解き、それを踏まえて英語あるいは日本語のどちらかの言語を自由に選択しコメントを返すことが必要になる。

4. 3 ブログアクセス及びコメントの調査方法

4. 3. 1 調査対象と期間

調査は、DNF開講期間としてENLに寄せられたアクセスおよびコメントを対象に分析を行った。この間にDNFにおいて受講者への課題提示が行われ、ENLにおいては掲載とメールによる発行連絡が表5のスケジュールで行われた。

表5：課題スケジュール

2007/4/10	デジタルネットワーク基礎（DNF）第1クールスタート
2007/4/21	English News Letter（ENL）6th issue 掲載開始
2007/4/23	ENL 6th issue 全学生メール通知 15:54
2007/4/26	DNF 第1クール第4週 weblog 課題提示 4/26-5/2 ↓
2007/5/2	
2007/5/24	DNF 第一クール終了
2007/5/29	DNF 第2クールスタート
2007/6/16	DNF 第2クール第4週 weblog 課題提示 6/16-6/28 ↓
2007/6/28	
2007/7/12	English News Letter 7th issue 掲載開始
2007/7/17	ENL 7th issue 全学生メール通知 11:43
2007/7/19	DNF 第2クール終了

4. 3. 2 アクセスログの抽出

DNFが開講されている2007年4月10日～7月19日の期間についてENLサイトへのアクセスログを抽出した。アクセスカウントはページ単位とした。併せて、ENLサイトに寄せられたコメントを上記DNF開講期間について抽出した。

4. 3. 3　全体集計結果

ENL へのアクセス状況は、上記期間の間に 5,736 回あり、コメントは 239 件寄せられた。この中には教職員からのコメント４件が含まれている。

さらにアクセス状況を日別にグラフ化したのが図４である。これによると、ENL　6 号発行の学生へのメール連絡に対応しアクセスのピークが始まり、DNF 第1クール第4週の Weblog 課題が示された時点から第1クール修了時までアクセスが続いている。授業終了と同時に一旦アクセスは少なくなる。第2クール第4週が始まった時点を再びピークとして修了時まで再びアクセスが続いている。最後に､ENL 7号発行のメール連絡がピークとなっている。

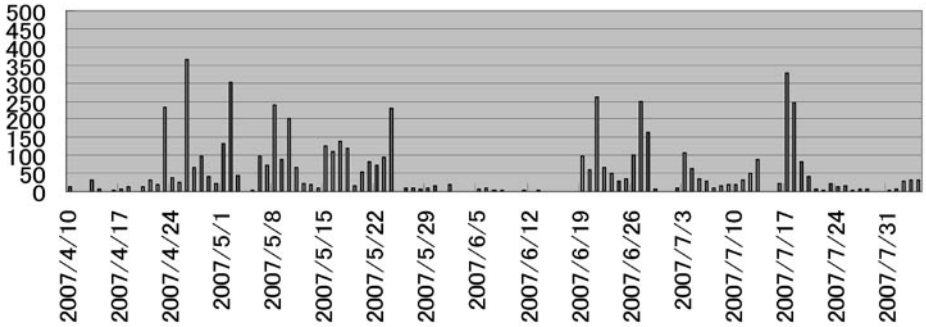

図４　2007DNF 開講期間 ENL6 号へのアクセス状況

コメント状況を日別にグラフ化したものが図5である。コメント投稿は、図4のアクセス状況とは必ずしも比例せず、アクセスが課題提示直後に最初のピークを示すのに対して、少し遅れた時期にピークを迎えることになる。したがってアクセスの初期には、閲覧のみのアクセス期間が存在することになる。

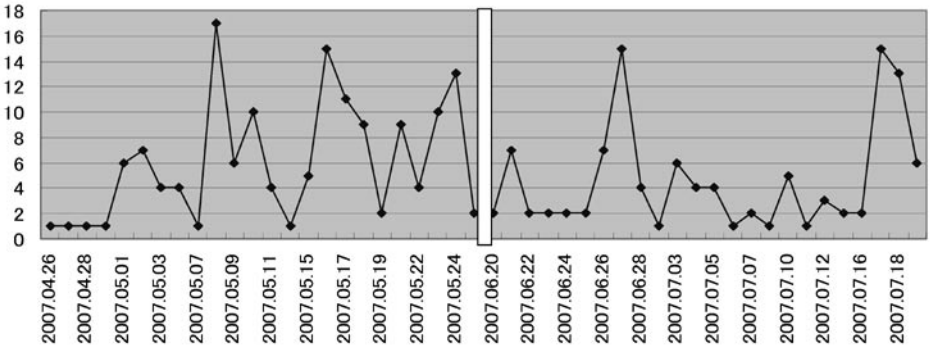

図５　ENL コメント投稿状況

4. 3. 4　記事ごとのコメント集計

最もコメントを集めたのは、【1】Hot English（英語：インターネット便利サイト情報）であり、コメント全体の半数近くが寄せられた。次にコメントが寄せられたのが【5】One Point Advice from the Teacher（ワンポイントアドバイス）であり、【1】What's New【4】Popular Topic among OJC Student's【3】Feature の順に寄せられている。

4. 4　アクセス状況の分析と考察

集計結果から、ブログへのアクセスは、各号の発行のメール連絡や授業でのサイト紹介などの何らかのアナウンスの直後にピークが生まれる。その後、授業課題などでサイトの記事内容を読解する必要のある期間は、アクセスが継続するものと考えられる。一方、双方向のコミュニケーション過程である ENL への書き込みは、授業期間中継続して行われ、授業スケジュールの中の第4週を終わってからも、書き込みが行われている。このタイムラグは、早計には言えないが当初コメントのない記事に対する最初にコメントをつけることのバイアスも考えられるが、英文内容を理解した上でコメントを入れる必要があることから、アナウンス直後は閲覧のみの期間が存在し、次に双方向コミュニケーションが起ち上がってくると読み取れる。いずれにしろ課題は期限を設けていないことから、授業期間終了まで継続的に双方向的コミュニケーションが行われたものと考えられる。どのような記事にコメントが寄せられたかは、読者としての1年生の履修者が記事の内から自由に選択した結果である。そのため、それぞれの記事の内容や量と何らかの相関が予想される。

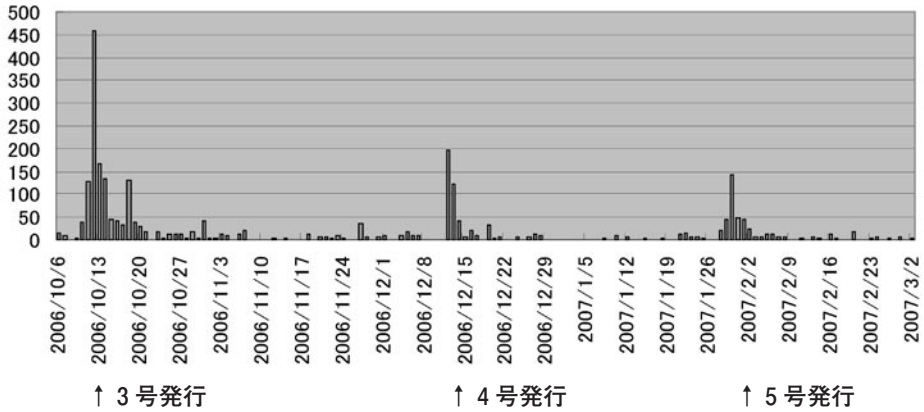

図３　'06 年度アクセス状況

また図 6 は、昨年度発行の ENL 3 ～ 5 号に関する日別アクセス状況である。2006 年 10 月 6 日から 2007 年 3 月 31 日までの期間に総数 2,621 回のアクセスがあった。サイトを開設した直後の3号では新奇性も手伝って顕著なアクセスがあったと考えられるが、アクセスはいずれも掲載直後に限られ、号を重ねるにしたがって順減している。

このようなアクセス頻度の違いは学習環境の違いを示している。2006 年度は一方的に

ENL を送信することのみだったが、2007 年度は情報教育と融合することにより双方向的なコミュニケーション環境を設定することができた。その結果学生は持続的に ENL にアクセスし、ENL の掲載各記事や他の学生のコメントを読んでいることが推測できる。英文を読むという一つの英語学習と、情報教育で求められる Weblog 上での双方向コミュニケーションを行うという学習がうまくかみあったと考えられる。これは適切な学習環境を学習者に提供することの重要性を示唆するものである。今回の課題が、1年生のみの履修科目であることを考慮すると、2年生以降の回生では連絡直後を除いてアクセスは継続しないと考えられる。このことから、一方向的連絡から、サイトと各人の何らかの双方向的なコミュニケーション過程を、他の回生にも導入することが、今後の ENL 展開には必要である。加えて、より主体的な学生参画を進めていく過程で、ENL への学生の記事編集参加など学生との共同開発が次のステージとして想定しうる。

5. コメントに見える学習環境

4.1. で述べたように、第一回 ENL 発行から一年が経過し発行回数が 6 回を数えた段階で ENL 編集委員グループは、「情報教育推進企画委員会」との協同で情報コンテンツと CMS の連携をもって情報教育と英語教育の融合を図る事とし、本学大学及び短期大学の 1 年次必修科目、DNF 履修生（計 308 名）に ENL コンテンツへのアクセス及びコメントの送付を 2007 年春学期課題として課した。以下にそのコメント分析を示す。

5. 1 ENL へのアクセス回数

2007 年春学期課題は第 6 回 ENL 発行直後であったため、必然的にそのアクセス回数の飛躍的増加が認められる。このように、コンテンツの充実を図るだけではアクセスの自然増加を促す事が困難である事がわかる。

また、3.2.4.（表 3）で示された「読みやすさ」の平均値を参照すると第 3 号及び第 6 号が共に 70% を超えていることから、ENL テキスト内容の主旨のひとつ、リーダビリテイ、の重要性が確認できる。

表 6　各号のアクセス集計

ENL 発行回	第 3 号	第 4 号	第 5 号	第 6 号
総アクセス件数	1,604	571	533	4,830

5. 2 DNF 履修生のコメント数内訳

短期大学と大学の履修生のコメント数に関して、顕著な相違は認められない。

表 7：2007 年度一年生の内訳

	307 生（短大）	707 生（四大）	合計
アクセス件数	120	115	235
総履修生に対する割合（%）	78%	75%	76%

5.3 DNF 履修生のコメント内容：英語でのコメント

DNF の課題とのコメントは英語・日本語双方とも可であったが、英語によるコメントは全体の 17%。707 生においては 31%に昇る。コメント内容を英語、日本語に区分すると四大生による英語によるコメント数は短期大学生をはるかに凌ぐ。拙速な結論は控えるが、四大では 3、4 年次で海外インターンシップや留学など英語を必要とするプログラムがあり英語の使用意欲が高い可能性がある。

表 8　英語でのコメント

	307 生（短大）	707 生（四大）	合計
英語によるコメント件数	5	36	41
アクセス数に対する割合（%）	4%	31%	17%

5. 4 英語コメントのパターン

アクセス順に英語によるコメントの現れるパターンを分析すると、日本語によるコメントが続く中で単独に現れるパターンと、一つの英語によるコメントが現れるとそれに触発（プロンプト）され英語コメントが続くパターンが見られる。この事象は Drnyei（2001, pp. 52-53）が提唱する言語習得方略の 9 にあてはまる。Drnyei はピア・ロール・モデルに学習者が出会うことが言語獲得を促すとみている。今回の英語で発信をした学生がピア・ロール・モデルとなり、それに触発された学生が「私も英語でコメントを書こう」と動機付けがなされた可能性が高い。英語でコメントした学生の TOEIC スコアや英語クラス別を比較したが、両者共に顕著な違いはなく、英語コメントと英語習熟度の関連性は認められない。この事象は英語による講義の展開、特に日本語を母語とする教員による展開群科目での英語講義の充実につながる可能性を持つと言える。すなわち、学生による日本語での質問には、必ず英語で問い返すことにより英語でのデイスカッションにつなげる、というプロンプトの効果が期待できるのではないだろうか。

* 英語によるコメントの間に三つ以上の日本語コメントが続く場合は単独とみなしている。

表 9　出現パターン

	単独パターン	連続パターン	合計
英語でのコメント件数	15	26	41
合計数に対する割合（%）	37%	63%	17%

6. まとめと今後の展望

知識が社会のすべての領域において価値をもつ「知識基盤社会」（knowledge-based society）の到来によって、単なる情報の集積ではなく、情報を共有化しさらに知識として構造化・組織化しうる能力の養成が大学教育において求められている。そのためにより高次のコミュニケーション能力や様々な知識の統合力を獲得するための試みが今後さらに必要である。

本取組は、当初導入教育で ENL サイトの紹介を行ってみよう、という意図で始まったが、その企画過程で情報教育の学習項目であるネット上の双方向通信の演習課題として発展した。英語教育において課外教育活動として編集された学習コンテンツは、異なる領域である情報教育において取りあげることで、さらに広く学習成果を得ることができた。コメントに際しては、ENL の内容を読み解くことが必要であると同時に、英語によるコメントに続くコメントが英語に変容したように他の学習者が ENL 上に残したコンテンツがさらに学習者相互に影響を与えた点も否定できない。結果として、それまでの ENL サイトに見られなかったアクセス数を得ると共に、導入教育において学習者の興味や関心に即した英語に親しむ機会を提供することもできたと言える。

このように、教育提供側においては、ひとつの学習オブジェクトをハブ（HUB）にして連携・協力する新たな可能性を示唆することができた。また学習者側において英語運用能力・情報処理能力等々の様々なスキルを統合して学ぶ機会はさらに重要になると考えられる。本取組が示唆する可能性のひとつは、異なる領域にある教育資源の学習者を中心にすえた統合であり、いまひとつは、学習者自身が参画する学習オブジェクトの創造である。

引用参考文献

文部科学省 .（2007.8.9）. 平成 19 年度学校基本調査 . 文部科学省 . 2007/11/09. http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index01.htm

Do¨rnyei, Z.（2001）. *Motivational Strategies in the Language Classroom.* Cambridge language teaching library, Cambridge: Cambridge University Press.

Krashen, S. D. & Terrell. T. O.（1988）, *The Natural Approach : Language Acquisition in the Classroom*, New York : Prentice Hall.

Pink, D. H.（2005）. *A Whole New Mind: Moving from the Information Age to the Conceptual Age.* New York : Riverhead Books.

注

1　学習管理システム：Web アプリケーションを通じて学習管理や運営に必要なツールをセキュアな環境で利用できるシステム

2　コンテンツ管理システム：Web コンテンツを構成する情報を一元的に保存・管理しサイトが構築できるシステム

3 Movable Type: http://movabletype.org/
4 Plone: http://plone.org/

Appendix

Appendix 1 English Newsletter 記事内容一覧

号		1st issue	2nd issue	3rd issue	4th issue	5th issue	6th issue	7th issue
	発行年月日	June 21st, 2006	July 28th, 2006	Ocober 10th, 2006	December 12th, 2006	January 29th, 2007	April 27th, 2007	July 13th, 2007
0	INDEX ヘッドライン	創刊号あいさつ	夏のあいさつ	ブログ形式リニューアルあいさつ	クリスマスあいさつ Warm-up Exercise	新年あいさつ Warm-up Exercise	新学期あいさつ Warm-up Exercise	Sunner Greeting Warm-up Exercise
1	What's New? 最新情報	スケジュール	スケジュール	スケジュール	スケジュール Field Work：報告	スケジュール	スケジュール	スケジュール
2	Hot English たのしい英語 インターネット紹介	Enjoy Google Earth	インターネット便利サイト情報	Warm-up Exercise	iPodで英語学習！	Creative Messages: Friendship & Graduation	元気が出ることば：Encouraging Words	Japanese Summer Recipe
3	Feature 特集	海外で頑張っている日本人(1) 野茂英雄 Hideo Nomo	海外で頑張っている日本人(2) 緒方貞子 Sadako Ogata	日本文化を英語で…俳句の世界… Japanese Culture in English	Christmas in America	Graduation: A Time of Endings and Beginnings	Memories of OJC in the 'old days'	What OJC students are doing this summer
4	Popular Topic among OJC Students 学生の間で話題となっているトピック	映画紹介: The Da Vinci Code	英語上手になりたい！音読って効果ある？	Phrases in Movies 映画の英語	The Snowman	昨年度アメリカで人気のあった卒業の歌	おもしろい本の紹介(1) Kokology	おもしろい本の紹介(2) When they were 22
5	One point advice from teachers ワンポイント・アドバイス	Listen Carefully	TOEIC	How to learn grammar	Some ideas for studying vocabulary!	Time Management	To find balance in your life	Summertime English